

Ⅱ 平成6年度の病害虫の発生状況

1 病害虫の発生経過概要および発生原因解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	苗立枯病	並	並	早期水稲、普通期水稲とも発生程度は平年並であった。		
	いもち病 葉いもち	早期：並 普通期：早	早期 やや多 普通期 やや多	早期では、6月1半旬より発生が見られ、7月上旬の発生圃場率は5.8%、発病株率は2.4%と、やや多の発生であった。 普通期では、5月6半旬より発生が見られ、7月下旬の発生圃場率は5.7%、発病株率は2.6%で、一部にずりこみや上位葉への進展も見られ、やや多の発生であった。	・昨年の発生による菌量の増加	・育苗箱施薬及び本田期における葉面散布
	いもち病 穂いもち	早期：並 普通期：並	早期 並 普通期 並	早期では、3月2半旬より発生が見られ、8月上旬の発生圃場率は7%、発病率は0.02%と並の発生であった。 普通期では、9月4半旬より発生が見られ、9月下旬の発生圃場率は1.7%、発病率は0.04%で一部に多発圃場が見られたが、並の発生であった。	・穂ばらみ期～出穂期の降雨	・出穂前の粒剤施薬 ・出穂期、穂ぞろい期および出穂後7～10日目の防除
	紋枯病	早期：並 普通期：並	早期 やや多 普通期 並	早期では、6月5半旬より発生が見られ、7月下旬の発生圃場率は7.5%、発病株率は2.3%で、やや多の発生であった。 普通期では、7月3半旬より発生が見られ、8月下旬の発生圃場率は4.5%、発病株率は9%で、一部で上位葉鞘への進展も見られたが、並の発生であった。	・茎数がやや多かった ・生育期の高温	・穂ばらみ期～出穂期にコブノメイガ、ウンカ類との同時防除
	ばか苗病	並	並	早期、普通期とも並の発生であった。		・ベノミル和菌性菌に有効な種子消毒剤の使用
	白葉枯病	並	少	早期では、発生を認めなかった。 普通期では、極めてわずかな発生であった。		・常発地区の一部で防除が実施された
	もみ枯病	並	少	早期では、発生を認めなかった。 普通期では、8月6半旬より発生が見られ、9月下旬の発生圃場率は6%、発病率は0.6%と、少の発生であった	・出穂時期の高温、降雨	・一部穂いもちとの同時防除
	アザミヤカ 萎縮病	並 並	並 少	越冬密度は平年並であった。第1世代成虫最盛期は6月2～3半旬、第2世代成虫最盛期は7月5半旬で、発生時期、発生量とも平年並であった。 第1世代の保害虫率は0.1%であった。 萎縮病の発生は少なかった。	・保害虫率が低かった。	・箱施薬によりいもち病、ウンカ類等との同時防除 ・本田ではウンカ類との同時防除

農作物名	病 害 虫 名	発生時期	発生量	発 生 経 過 の 概 要	発生原因の解析	防 除 の 概 要
イ ネ	ヒトリウカ	並	並	越冬密度、第1世代幼虫の小麦圃場における生息量は、ともに平年並であった。越冬世代成虫最盛期は3月5～6半旬、第1世代成虫最盛期は6月2～3半旬、第2世代成虫最盛期は7月2～3半旬で発生時期、発生量とも平年並であった。第1世代の保毒虫率は0.9%であった。		・箱施薬によるウンカ類との同時防除
	箱葉枯病	並	少	箱葉枯病は、7月上旬より発生が見られたが、発病株率は低く、少発生であった。		
	セジロウカ	並	少	5月16日に初飛来が見られ、6月11日以降、断続的な飛来があったが、全体の飛来量は、平年より少なかった。	・飛来量が少なかった	・育苗箱施薬による次世代増殖の抑制効果
	ヒトリウカ	やや早	少	セジロウカとほぼ同時期に飛来が見られた。株当たり寄生虫数は、8月下旬に0.01頭、9月下旬に0.02頭と平年より少なかった。	・飛来量が少なかった	・育苗箱施薬による次世代増殖の抑制効果 ・コブノメイガ等との同時防除
	コブノメイガ	並	並	6月30日に初飛来が見られ、その後、断続的な少飛来があったが、飛来量は平年よりやや少なかった。 7月中旬より幼虫の巻葉加害が目立ち始め、7月下旬の被害発生圃場率は早期で6.4%、普通期で9.2%、被害株率は早期で7%、普通期で15%であった。8月中旬以降、新葉の被害は減少した。8月下旬の被害発生圃場率は8.5%、被害株率は2.8%で、並の発生であった。	・断続的な飛来であった。 ・7～8月の高温・少雨による増殖	・第2世代の防除は紋枯病との同時防除
	イヌブエ	並	並	越冬密度は平年並であった。早期では、田植直後から圃場への侵入が見られ、5月下旬の被害発生圃場率は9.3%、株当たり寄生虫数は0.06頭であった。普通期では、山間地の早植地帯で被害が目立ったが、並の発生であった。		・箱施薬による防除が主体
	斑点米カミシ類	並	やや多	6月下旬以降、雑草地での発生量が多かった。早期では、7月下旬の発生圃場率が2.1%、20回すくい取り調査の平均値が0.5頭であった。普通期では、8月下旬の発生圃場率が2.4%、20回すくい取り調査の平均値が0.4頭で、全般的にはやや多の発生であった。	・暖冬により越冬量が多かった ・7～8月の高温・少雨	・出穂期～乳熟期に穂いもちとの同時防除
	カミシゴカイ	並	並	昨年秋期の発生が多く、越冬生員が多かった。3月下旬以降、水路での活動が見られた。発生の多い圃場では、田植直後の水稲が加害を受けたが、並の発生であった。		・貝、卵塊の捕殺 ・IBP粒剤の施用

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ムギ類	さび病類	並	やや多	小麦の赤さび病は4月下旬から、大麦の小ささび病は5月上旬から発生が見られた。5月下旬の小麦の赤さび病の発生圃場率は14%、発病率は4%で、一部に多発圃場が見られた。その他のさび病類は発生を認めなかった。		・一部地域を除いて防除がほとんどされていない。
	うどんこ病	並	並	大麦、小麦とも3月下旬から発生が見られ、4月下旬以降小麦の一部に多発圃場が見られたが、並の発生であった。		
	赤かび病	やや早	並	大麦では4月中旬から、小麦では4月下旬から発生が見られた。5月上旬の発生圃場率は、大麦で89%、小麦で71%、発病率は、大麦で3%、小麦で2%と並の発生であった。		
	絹糸病	並	並	一部地域の二条大麦で、3月下旬から発生が見られたが、並の発生であった。小麦では発生を認めていない。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ジャガイモ	葉巻病	春作：並	春作：やや少	春作：全般にやや少の発生であった。		・種いも更新 ・アブラムシの防除
		秋作：並	秋作：並	秋作：11月下旬の発生圃場率7%、発病株率0.8%であった。		
	モザイク病	春作：並	春作：並	春作：生育後期の5月下旬の発生圃場率6%、発病株率0.4%であった。		・種いも更新 ・アブラムシの防除
		秋作：並	秋作：並	秋作：10月上旬の発生圃場率4%、発病株率0.1%であった。		
	疫病	春作：やや早 秋作：やや遅	春作：やや少 秋作：少	春作：4月2日に初発を認め4月下旬の発生圃場率10%発病株率1.8%とやや多の発生であったが、その後の進展は少なく5月以降はやや少の発生であった。 秋作：極めて少発生であった。	・5月の晴天で抑制 ・秋期の晴天乾燥で抑制	・初期防除の徹底
	アブラムシ類	春作：やや遅 秋作：並	春作：並 秋作：やや多	春作：4月上旬まではやや少で推移した。4月下旬より増加し、5月下旬の発生圃場率91%、寄生株率54%、株当たり虫数143頭と生育後期に急増した。 秋作：11月上旬以降増加し、一部多発圃場も見られた。11月下旬の発生圃場率89%、寄生株率67%、株当たり虫数140頭であった。	・3月の低温で抑制 ・5月の晴天 ・10～11月の高温乾燥	・アブラムシの種類を考慮した薬剤の選択。
	ニジュウワシテントウ	春作：並 秋作：並	春作：並 秋作：並	春作：5月下旬の発生圃場率6%、寄生株率0.1%と平年並の発生であった。 秋作：11月下旬の発生圃場率4%、寄生株率0.1%であった。		・アブラムシ類との同時防除
ジャガイモ	ジャガイモ	春作：並 秋作：並	春作：並 秋作：やや多	春作：5月上旬の発生圃場率8%、寄生株率1.5%であった。 秋作：10月上旬の発生圃場率は52%、被害率は5%であった。	・秋期の高温乾燥	・アブラムシ類との同時防除
	食葉性ヤガ類	春作：並 秋作：並	春作：並 秋作：多	春作：全般に平年並の発生であった。 秋作：10月上旬のヨトウムシ類の食害発生圃場率96%食害株率44%であった。	・夏秋期の高温乾燥	・アブラムシ類との同時防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ダイズ	べと病	並	やや少	9月下旬より発生が見られたが、やや少の発生であった。		
	葉枯病	並	やや少	8月下旬より発生が見られ、9月下旬の発生圃場率は17%、発病株率は7%で、一部に多発圃場が見られたが、やや少の発生であった。	・生育期の少雨 ・台風の襲来がなかった	
	ハスモンヨトウ	やや早	やや多	7月下旬より白変葉が見られ、その後各地で発生した。白変葉の発生圃場率は、8月下旬11%、9月上旬61%、株当たり寄生虫数は、9月下旬0.2頭と、やや多の発生であった。	・7月～9月の高温、少雨による増殖	・若齢期を主体に防除が実施された。
	蛸翅目幼虫類	並	やや少	9月下旬よりウワバ類の発生が見られたが、平年よりやや少なかった。		
	かみ類	やや早	やや多	8月上旬以降発生が見られ、8月下旬の発生圃場率は26%、寄生株率は3%、株当たり寄生虫数は0.1頭と、やや多の発生であった。		・ハスモンヨトウとの同時防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
カンキツ	そうか病	やや遅	やや少	春葉での初発は4月22日に県予察農場で認め、平年よりやや遅かった。その後の葉での発生は、6月下旬の発生圃場率は10%、発病率0.6%とやや少なく、果実での発生は5月下旬より認められたが6月下旬の発生圃場率は8%、発病率は0.7%とやや少ない発生であった。		・発芽期及び幼果期に防除が実施された
	かいよう病	やや遅	やや少	越冬病斑量は平年並であった。春葉での初発は、4月25日に大村市で認め、平年よりやや遅かった。その後の葉での発生は、8月下旬の発生圃場率は23%、発病率は0.3%と平年並であった。果実での発生は、7月下旬より認められたがその後の発生増加はみられず、平年よりやや少ない発生であった。	・台風の襲来がなかった	・発芽前、開花前に防除が実施された
	黒点病	並	少	春期の枯れ枝の発生量は平年並であった。果実での発病は6月上旬より認められたが、10月下旬の発生圃場率は49%、発病率は12%と低かった。	・梅雨期間が短く、降水量も少なかった	・薬剤の残効を考慮した防除が実施された。
	ヤナギタガシ	第1世代：並 第2世代：やや早	並	1齢幼虫の初発時期は、第1世代が5月中旬で平年並、第2世代は7月中～下旬と平年に比べやや早かった。発生量はともに平年並であった。 県下全域で寄生蜂の寄生が認められている。		
	シロカビ	並	やや多	春先より発生は平年並であったが、6月上旬より発生面積が拡大し、7月上旬には発生圃場率48%、寄生率19%と高くなった。8月上旬には一時減少したが、8月下旬には再び増加した。10月上旬以降、発生圃場率は50%以上、寄生率15～18%と高く、果実の被害が多い圃場も散見された。	・秋期に晴天日が多く、乾燥	・夏季マシ油乳剤の採用 ・梅雨明け及び8月下旬～9月上旬、10～11月に防除が実施された
	かみ類	並	少	越冬成虫量は平年並であった。予察灯への飛来は6月下旬より増加し7月の誘殺量は平年より多かったが、8月に入り減少し9月以降少なくなった。また、園への飛来や果実の被害もほとんど認めなかった。	・ヒノキきゅう果の若生量が少ない	・防除はほとんど実施されていない
	アブラムシ類	遅	並	各地で発生がみられたが、平年並の発生であった。	・春葉及び夏秋梢の発芽が遅れた	
	ササゲアザミ	並	やや多	6～7月の成虫発生量はやや多く、8月は平年並であった。被害果は6月下旬より認められ、9月下旬の被害果発生圃場率は69%、被害率は9%とやや多の発生であった。	・5月に晴天日が多く、増殖に好適であった	・黒点病との同時防除 ・常緑樹では専用殺虫剤による防除が実施された

農作物名	被害虫名	発生時期	発生量	発 生 経 過 の 概 要	発生原因の解析	防除の概要
ビワ	がんしゅ病	やや遅	やや少	春葉での初発は4月14日と平年より遅く、夏葉での初発は6月23日と平年並であった。発生量は春葉、夏葉とも平年に比べやや少なかった。		・芽かき、せん定後に防除
	灰斑病	並	並	春葉は平年に比べやや少ない発生であった。夏葉では平年並の発生であった。		・春葉及び夏葉伸長期に防除 ・登録薬剤が少ない。 ・ファイトネーム剤の効力低下
	褐斑病	並	並	春葉は平年よりやや少なく、夏葉は平年並の発生であった。		
	ナシタシキ	並	やや多	フェロモントラップによる誘殺量は、各世代とも平年に比べやや多かった。		・がんしゅ病の防除時に合わせて、カルタップ剤が散布された。
ナシ	黒斑病	やや早	並	初発は4月20日で平年並に比べやや早く、5月下旬にかけて発生が増加した。6月以降は一部多発個を除いて発生増加はみられず、平年並の発生であった。		
	黒星病	やや早	並	初発は5月9日で平年に比べやや早く、5月中旬には一部地域で幼果を中心に多発した。6月まで各地で発生がみられたが7月以降は目立った発生の増加はなく、平年並の発生となった。		・EBI剤等による防除が実施された。
	赤星病	やや遅	並	初発は4月18日で平年よりやや遅かった。4月下旬までは発生が少なかったが、5月上旬以降増加し、平年並の発生であった。		
	うどんこ病	やや早	並	6月下旬より発生を認め、その後目立った増加はみられなかったが9月に入り増加した。全般には平年並の発生となった。		
	ナシタシキ	並	やや多	フェロモントラップによる誘殺量は、各世代とも平年よりやや多かった。		
	ハダニ類	やや早	並	6月上旬より発生を認め、7月及び9月には一部で多発したが平年並の発生であった。		
	カメムシ類	並	やや少	越冬成虫量は平年並であった。予察灯への飛来は、5月～6月は平年並、6月下旬から増加し7月には平年より多くなった。しかし、幼果期から収穫期まで樹への飛来及び加害はほとんど見られなかった。		
	アブラムシ類	やや遅	やや少	寄生は4月上旬より認めたがその後の発生は少なく、5月下旬の寄生新梢率19%と平年に比べやや少ない発生であった。ユキヤナギアブラムシとワタアブラムシが主であった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ブドウ	黒とう病	並	並	初発は4月25日で平年並であった。その後7月上旬まで増加したが、以降の発生は少なく、全般には平年並の発生であった。		
	べと病	並	少	生育期間を通じて発生はほとんど見られず、平年に比べ少ない発生であった。	・梅雨期の降水量が少なかった。	
	うどんこ病	並	並	一部早根掛け栽培で発生したが、平年並の発生であった。		
	ササゲアザミ	並	並	第2世代成虫はやや多かったが、果房への被害は目立たず平年並の発生であった。	・5月に晴天日が多かった	・開花期～幼果期の防除が徹底された
チャ	炭そ病	並	やや少	一番茶の残芽に発生がみられたが、各茶期及び秋芽での発生は少なく、全般にやや少の発生であった。	・降雨量、降雨日数が少なかった	・防除回数は例年に比べ2回程度少なかった
	もち病	並	やや少	5月上旬から発生がみられたが、その後の発生の増加はなく、やや少の発生であった。		
	ササゲアザミ	並	少	各世代とも予察灯への誘殺量は平年に比べ少なく、特に第3世代、第4世代では発蛾最盛期が早晩と異なっていた。巻葉の被害も各世代とも少なかった。	・昨秋（第四世代）の発生が少なかった	・ハマキ類対象の防除回数は例年に比べ1～2回少なかった
	ササゲアザミ	並	少	各茶期を通して平年に比べ少ない発生であった。		
	ササゲアザミ	並	やや多	春先からやや少ない寄生密度で推移していたが、7月に入って増加した。9月以降は幼木園や秋整枝を行わなかった園を中心に多発し、秋芽の被害が多かった。全般にやや多の発生であった。	・三番茶期以降の少雨、高温、乾燥により、三番茶芽及び秋芽の生育が遅延で、増殖に好適であった	・梅雨明け以降の防除回数は例年に比べ2回程度多かった
	ササゲアザミ	並	やや多	7月中旬から10月下旬までやや多くみられ、三番茶及び秋芽に吸付害が多かった。全般にやや多の発生であった。		
	カサネアザミ	並	やや多	春先から寄生密度が高く、一番茶摘採後二番茶期まで多発した。二番茶終了後はしばらく低い密度で推移したが、8月下旬以降やや増加し、全般にやや多の発生であった。	・5月に晴天日が多かった	
	カサネアザミ	やや早	並	越冬虫は少なかったが、第一世代以降は前年に比べ増加した。	・5月に晴天日が多かった ・梅雨期の降水量が少なかった	

農作物名	病 害 虫 名	発生時期	発生量	発 生 経 過 の 概 要	発生要因の解析	防 除 の 概 要
冬春トマト (平成5年 植付)	モザイク病	並	並	3月下旬一部の圃場で発生を認めた。		・土壌消毒 ・アブラムシ防除
	疫病	並	やや少	12月中旬と3月下旬に一部の圃場で発生を認めたが、やや少の発生であった。		・初期防除の徹底
	葉かび病	並	やや多	12月中旬に発病株率10%と増加し、その後も全般的にやや多で推移した。	・11月の曇天 ・暖冬で経過した	・発病初期からの薬剤散布
	灰色かび病	並	並	1月下旬の発病果率は0.1%、5月下旬は0.4%であった。		
	アブラムシ類	並	並	全般に平年並の発生であった。		
	カジラミ類	並	並	全般的に平年並の発生であった。主体はタバココナジラミであった。		
冬春トマト (平成6年 植付)	モザイク病			12月中旬、発生を認めていない。		
	疫病			12月中旬、発生を認めていない。		
	葉かび病			12月中旬、発生を認めていない。		
	灰色かび病			12月中旬、発生を認めていない。		
	アブラムシ類			12月中旬、発生を認めていない。		
	カジラミ類	並	並	11月下旬の発生圃場率67%、寄生株率11%とやや多であったが12月中旬には発生圃場率20%、寄生株率0.7%と減少した。		
冬春きゅうり (平成5年 植付)	モザイク病	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		・アブラムシの防除
	斑点細菌病	並	やや少	12月中旬の発生圃場率7%、発病果率0.4%であった。		
	べと病	並	やや多	12月中旬の発病果率は4.7%、3月下旬は10.4%であった。	・11月の曇天 ・暖冬で経過した	・ハウス内の湿度低下 ・発生初期からの薬剤散布
	褐斑病	並	並	12月中旬より発生し2月下旬の発生圃場率6%、発病果率2.2%であった。		
	うどんこ病	並	並	12月中旬の発病果率は5.4%、5月上旬は10%であった。		
	灰色かび病	並	並	12月中旬の発病果率は0.1%、4月下旬は1.9%と増加したが、全般に平年並の発生であった。		・薬剤敏感性菌対策
	菌核病	並	並	12月中旬の発病果率は0.8%と増加したが、4月上旬は0.02%と平年並の発生であった。		・被害果の除去
	アブラムシ類	並	並	2月下旬まで寄生率0.02%以下で推移した。3月下旬よりやや増加したが全般的には平年並の発生であった。		
	ミミズ・ワジミ	並	やや少	4月上旬までは寄生率2%以下で推移した。4月下旬には一部多発圃場も見られ寄生率9.1%まで増加したが全般的にはやや少の発生であった。		・定植時の薬剤施用 ・初期防除
	カジラミ類	並	並	全般に平年並の発生であった。主体はタバココナジラミであった。		

農作物名	病 害 虫 名	発生時期	発生場所	発 生 経 過 の 概 要	発生要因の解析	防 除 の 概 要
冬春きゅうり (平成6年 植付)	モザイク病			12月中旬、発生を認めていない。		
	斑点細菌病			12月中旬、発生を認めていない。		
	べと病	並	並	12月中旬の発生圃場率25%、発病率5.8%であった。		
	根腐病	並	並	11月下旬の発生圃場率21%、発病率1.6%であった。		
	うどんこ病	並	並	11月下旬の発生圃場率29%、発病率1.9%であった。		
	灰色かび病	並	やや多	12月中旬の発生圃場率15%、発病率0.3%であった。		
	腐敗病	並	やや多	12月中旬の発生圃場率30%、発病率0.8%であった。		
	アブラムシ類	並	並	12月中旬、発生を認めていない。		
	シシトウジ類	並	並	12月中旬、一部多発圃場のみ発生圃場率19%、寄生率6.3%であった。		
	コジラネ類	並	並	12月中旬の発生圃場率38%、寄生率5.8%であった。		
すいか	つる枯病	並	並	全般に平年並の発生であった。		
	炭そ病	並	並	6月上旬の発病率は0.6%であった。		
	アブラムシ類	並	やや多	5月下旬より増加し、6月下旬の発生圃場率89%、寄生率21%であった。	・5月の晴天	
	コジラネ類	並	やや多	5月下旬の発生圃場率75%、寄生率17.3%であった。	・5月の晴天	
メロン	モザイク病	並	並	一部の圃場で発生が見られたが、全般に平年並の発生であった。		・寒冷紗被覆によるアブラムシの飛来防止
	えそ斑点病	並	並	6月上旬一部の圃場で発生を確認した。		・土壌消毒
	斑点細菌病	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		
	べと病	並	並	4月下旬の発生圃場率6%、発病率1%であった。		・初期防除の徹底
	うどんこ病	並	やや多	5月上旬より増加し5月下旬の発生圃場率67%、発病率11%であった。	・5月の乾燥	・葉腐病性菌の発生回避を念頭においた薬剤散布
	つる枯病	並	並	5月上旬の発生圃場率13%、発病率0.4%であった。		
	アブラムシ類	並	並	4月下旬まで寄生率0.3%とやや少で推移した。5月上旬より増加したが全般には平年並の発生であった。		
	シシトウジ類	並	並	寄生率0.7%以下で推移し平年並の発生であった。		・初期防除の徹底

農作物名	病 害 虫 名	発生時期	発生量	発 生 経 過 の 概 要	発 生 要 因 の 解 析	防 除 の 概 要
春はくさい (平成5～ 6年播種)	根こぶ病	並	並	平年並の発生であった。		・定植時の土壌施肥による 防除の実施
	コナガ	並	並	全般に平年並の発生であった。		・薬剤抵抗性対策のための 輪番散布
秋冬はくさい (平成5年 播種)	モザイク病	並	並	11月上旬の発生圃場率8%、発病株率0.04%であ った。		・生育初期のアブラムシ防 除の実施
	軟腐病	並	やや多	11月上旬の発生圃場率25%、発病株率3.3%であ った。	・11月の気温が高く降水 量が多かった。	
	白斑病	並	並	11月下旬より発生し、12月上旬の発生圃場率44%、 発病株率2.7%であった。		
	べと病	並	並	12月中旬に発生が増加したが、全般には平年並の発生で あった。		
	黒斑病	並	並	11月下旬の発生圃場率27%、発病株率2.7%であ った。		
	アブラムシ類	並	並	寄生株率は11月上旬7%、12月中旬11%と平年並で 推移した。		・コナガとの同時防除
	コナガ	並	並	10～12月の寄生株率は1.7～16.6%で推移した。		・薬剤抵抗性対策のための 輪番散布
	ヨトウムシ類	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		・コナガとの同時防除
秋冬はくさい (平成6年 播種)	モザイク病	並	並	11月下旬の発生圃場率は11%、発病株率は0.02% であった。		・生育初期のアブラムシ防 除の実施
	軟腐病	並	やや少	12月中旬に一部圃場で発生を認めた。	・秋期の少雨、乾燥	・
	白斑病	並	並	12月中旬の発生圃場率は33%、発病株率は1%であ った。		
	べと病	並	並	12月中旬の発生圃場率は11%、発病株率は2.2%で あった。		
	黒斑病		並	12月中旬現在、発生を認めていない。		
	アブラムシ類	並	並	10～12月の寄生株率は1.3～3.3%で推移した。		・コナガとの同時防除
	コナガ	並	やや多	一部多発圃場がみられ、10～12月の寄生株率は12～ 22%で推移した。	・秋期の少雨、乾燥	・薬剤抵抗性対策のための 輪番散布
	ヨトウムシ類	並	並	生育前半はヨトウムシ類の寄生が多かったが、その後は並 の発生である。		

農作物名	病 害 虫 名	発生時期	発生量	発 生 経 過 の 概 要	発生要因の解析	防 除 の 概 要
冬キャベツ (平成5年 植付)	黒腐病	並	並	10月下旬より発生、11月下旬には一部多発圃場も見られたが、全般的には平年並の発生であった。		・初期防除の徹底
	菌核病	並	やや多	11月下旬より発生が増加し、2月下旬の発生圃場率58%、発病株率2.7%であった。	・11月の曇天 ・暖冬で経過した	
	アブラムシ類	並	並	9～12月の寄生株率は1.2～13.7%で推移した。		・コナガとの同時防除
	コナガ	並	並	9～12月の寄生株率は1.3～16.1%で推移した。		・薬剤抵抗性対策のための 輪番散布
	ヨトウムシ類	並	並	ヨトウガが一部で多発したが、その他の種は全般に平年並であった。		・コナガとの同時防除
	モンシロチョウ	並	並	10月下旬の発生圃場率14%、寄生株率2%と平年並の発生であった。		・コナガとの同時防除
冬キャベツ (平成6年 植付)	黒腐病	並	やや少	12月中旬現在、全般にやや少の発生である。	・秋期の少雨、乾燥	・初期防除の徹底
	菌核病	並	やや少	12月中旬現在発生を認めていない。	・秋期の少雨、乾燥	
	アブラムシ類	並	並	9～12月の寄生株率は1～6%で推移した。		・コナガとの同時防除
	コナガ	並	やや多	9～12月の寄生株率は19～29%で推移した。	・秋期の少雨、乾燥	・薬剤抵抗性対策のための 輪番散布
	ヨトウムシ類	並	やや多	9～10月にかけて寄生株率5～14%とやや多の発生であった。	・秋期の少雨、乾燥	・コナガとの同時防除
	モンシロチョウ	並	並	9～12月にかけて1%以下で推移した。		・コナガとの同時防除
たまねぎ (平成5年 植付)	白色疫病	並	並	発病株率3%以下で推移し、全般に平年並の発生であった。		・初期防除の徹底
	べと病	やや遅	やや少	全般にやや少の発生であった。		
	ボトリス菌による 葉枯症	並	並	1月より発生がみられ、4月下旬の発病株率23%と平年並の発生であった。		・他病害との同時防除
	ネギアザミウマ	並	並	4月上旬までは寄生株率1.6%以下とやや少で推移した。4月下旬には寄生株率63%と増加したが、全般には平年並の発生であった。		
たまねぎ (平成6年 植付)	白色疫病			12月中旬現在、発生を認めていない。		・初期防除の徹底
	べと病			12月中旬現在、発生を認めていない。		
	ボトリス菌による 葉枯症			12月中旬現在、発生を認めていない。		
	ネギアザミウマ	並	やや多	12月中旬の発生圃場率は35%と寄生株率は13.4%であった。		

農作物名	病 害 虫 名	発生時期	発生量	発 生 経 過 の 概 要	発 生 要 因 の 解 析	防 除 の 概 要
冬にんじん (平成5年 播種)	黒葉枯病	並	並	11月下旬の発生圃場率は27%、発病株率は1.1%と 平年並の発生であった。		
	うどんこ病	並	やや少	12月中旬の発生圃場率は13%、発病株率は0.5%と やや少の発生であった。		
冬にんじん (平成6年 播種)	黒葉枯病	並	並	9月下旬の発生圃場率は13%、発病株率は0.4%で、 11月の発生圃場率は50%、発病株率は5.2%であった。		
	うどんこ病	並	やや多	10月より各地で発生し、10月下旬の発生圃場率は27 %、発病株率は7.9%、11月下旬には発生圃場率は92 %、発病株率は53%であった。	・秋期の乾燥	
冬レタス (平成5年 植付)	斑点細菌病	並	並	全般に平年並の発生であった。		
	腐敗病	やや早	やや多	10月中旬より発生を確認し、10月下旬の発生圃場率は 22%、発病株率は16%で早出しレタスで多発した。	・9月中旬～10月上旬の 降雨	
	灰色かび病	並	並	11月下旬より発生し、3月下旬の発生圃場率22%、発 病株率0.3%であった。		・イロダシ剤、チオファートME 剤の散布
	腐敗病	やや早	やや多	11月下旬より各地で発生し、12月中旬の発生圃場率 50%、発病株率1%であった。	・11月の曇天 ・暖冬で経過した	
冬レタス (平成6年 植付)	斑点細菌病	並	やや少	12月中旬に一部圃場で発生を認めた。	・秋期の少雨、乾燥	
	腐敗病	並	やや少	11月下旬の発生圃場率は8%、発病株率は0.1%であ った。	・秋期の少雨、乾燥	
	灰色かび病	並	並	12月中旬の発生圃場率は11%、発病株率は0.02% であった。		・イロダシ剤、チオファートME 剤の散布
	腐敗病	並	並	11月下旬の発生圃場率は8%、発病株率は0.1%であ った。		

農作物名	病 害 虫 名	発生時期	発生量	発 生 経 過 の 概 要	発生要因の解析	防 除 の 概 要
いちご (平成5年植)	炭そ病	並	やや多	<i>Glomerella cingulata</i> による炭そ病は、育苗期からやや多く、定植後も萎ちょう症状を示す株がみられた。	・7～8月の降雨	・育苗期の薬剤散布の実施
		並	多	<i>Colletotrichum acutatum</i> による炭そ病は、既発牛地で多発した。		
	萎黄病	並	並	全般に平年並の発生であった。		・土壌消毒
	うどんこ病	やや早	やや多	育苗期は5月下旬の発生圃場率81%、発病株率32%、8月上旬の発生圃場率50%、発病株率26%と多発した。定植後も9月から発生し、11月下旬の発生圃場率48%、発病株率7%、発病果率は0.7%と多の発生であったが1月以降はやや多で推移した。	・前作圃場での多発 ・7～8月の低温 ・育苗期の多発 ・株冷、夜令栽培の増加 ・本圃への罹病苗の持ち込み	・主としてEBI剤中心の防除
	灰色かび病	並	並	11月下旬より発生し、3月下旬の発生圃場率27%、発病果率は0.3%であった。		・ハウス内の湿度低下 ・イロジ菌剤、ビンカゾリ剤、プロシモン剤の散布
	アブラムシ類	並	並	寄生株率は0.2～5%で推移し全般に平年並の発生であった。		
	ハダニ類	並	やや多	10月下旬に寄生株率7%と増加し、その後も全般にやや多の発生であった。		
	ハスモンヨトウ	並	並	定植直後から発生し、食害株率は1%前後で推移した。		
いちご (平成6年植)	炭そ病	並	やや多	<i>Glomerella cingulata</i> による炭そ病は、9月上旬の発生圃場率22%、発病株率0.4%であった。	・7～8月の降雨	・育苗期の薬剤散布の実施
		並		<i>Colletotrichum acutatum</i> による炭そ病は、発生地が拡大した。		
	萎黄病	並	やや多	育苗期に一部で多発圃場がみられた。9月下旬本圃での発生圃場率は4%、発病株率は0.04%であった。	・7～8月の高温	・土壌消毒
	うどんこ病	並	並	5月上旬～7月上旬までは発病株率20～49%と多発したが、7月下旬以降は平年並の発生で推移している。定植後、11月下旬の発生圃場率は16%、発病株率は1.1%、発病果率は0.2%であった。	・夏期の高温	・育苗期にEBI剤中心の防除 ・古葉の摘葉
	アブラムシ類	並	やや多	育苗期はやや多で推移し、定植後、11月上旬の発生圃場率は56%、寄生株率は12%であった。	・秋期の少雨、乾燥	
	ハダニ類	並	並	育苗期はやや多で推移した。9月下旬本圃での発生は平年並である。		
	ハスモンヨトウ	並	多	8月上旬より増加し、9月下旬本圃での食害発生圃場率81%、食害株率24%と多かった。その後も食害株率は高く推移した。	・夏秋期の高温、少雨	・育苗期及び定植直後の薬剤防除 ・一部フェロモントラップによる大量誘殺法の導入
しょうが	モザイク病	並	やや少	一部の圃場で発生がみられたが、やや少の発生であった。		
	根茎腐敗病	並	やや少	全般にやや少の発生であった。	・夏期の少雨	・定植前の土壌消毒 ・発病後の粒剤施用
	白星病	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		
	紋枯病	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		
	メイガ類	並	並	9月下旬の被害株率7.6%であった。		